SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

中国語zijiと日本語「自分」の阻止効果

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-03-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 翟, 勇 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00026333

論文

中国語 ziji と日本語「自分」の阻止効果

翟　勇（静岡大学　大学教育センター）

はじめに

Chomsky(1981)が提案された束縛原理(1)は普遍文法を構成する下位理論の一つである。照応形(anaphor)、代名詞類(pronominal)、およびそれ以外の名詞句である指示表現(R-expressing)に関して、どの領域に先行詞があるべきかを規定する。（原口・中村 1996: 55）

(1)　束縛原理(Binding Principle)

(A) 照応形は、その統率範疇の内部で束縛されていなければならない。

(B) 代名詞は、その統率範疇の内部で自由でなければならない。

(C) 指示表現は自由でなければならない。

(2)　a. John said that [Tom$_i$ criticized himself$_i$].

b. John$_i$ said that [Tom criticized him$_i$].

c. John said that [Tom criticized Mary].

[Tom criticized ・・・]は統率範疇(governing category)である。(2a)の照応形 himself は統率範疇内の Tom と同一指標を持つことができるが、統率範疇外の John と同一指標を持つことができない。一方、(2b)の代名詞 him は統率範疇内の Tom と同一指標を持つことができないが、統率範疇外の John と同一指標を持つことができる。(2c)の指示表現 Mary は自由で、Tom, John と束縛関係になっていない。

中国語“自己 ziji” と日本語「自分」に関わる原理は束縛原理 A である。Chomsky が提案された束縛原理は主に英語に基づいている分析である。Chomsky は束縛原理が普遍文法であり、すべての言語に適用すると考えている。 しかし、(3)と(4)で示したように、中国語 ziji と日本語「自分」は Chomsky が提案された束縛原理 A に違反し、節内での束縛（局所的束縛）と節を超えた束縛（長距離束縛）の両方を許すものと考えられている。

(3) 张三$_i$ 觉得［李四$_j$ 对　自己$_{i/j}$　没信心］。

(4) 張三$_i$は［李四$_j$が　自分$_{i/j}$を　信用していない］と思っている。

(3)中国語の“自己 ziji”、(4)日本語の「自分」は補文の主語「李四」、主節の主語「張三」のいずれも先行詞と解釈されることが可能である。長距離束縛について、中国語では人称の異なる名詞句が介在すると照応形“自己 ziji”の長距離束縛が阻止され、局所的束縛のみが許されるという現象（阻止効果: the blocking effect）が存在する(Huang 1984, Tang 1989, Huang and Tang 1991, Pan 1997,2001)。例えば、(5)では、補文の主語が 1 人称ないし 2 人称であることで、“自己 ziji”の主節主語による束縛が阻止されている。一方、(6)の日本語では、「自分」の主節主語による束縛が阻止されていない。よって、日本語「自分」の阻止効果についてあまり考察され

ていない。

(5) 张三$_i$ 觉得［我/你$_j$ 对　自己$_{*i/j}$　没信心］。
(6) 張三$_i$は［僕/君$_j$が　自分$_{i/j}$を　信用していない］と思っている。

本論文の第1節では、中国語 ziji の阻止効果の特徴を明らかにする。また、中国語 ziji 阻止効果を説明する理論の問題点を述べる。第 2 節では、日本語「自分」の阻止効果の先行研究の問題点を述べる。第 3 節では、中国語 ziji と日本語「自分」の阻止効果を比較する。第 4 節において、動詞の指向性は中国語 ziji と日本語「自分」の指向に影響を与えると提案する。第5節では、今後の研究課題を示す。

1　中国語 ziji の阻止効果

1.1 中国語 ziji の阻止効果の特徴

Huang (1984)は中国語 ziji に阻止効果が存在すると提案されて以来、阻止効果についての研究が盛んになってきた(Tang 1989, Huang and Tang 1991, Pan 1997,2001)。先行研究をまとめると、中国語 ziji の阻止効果は以下の五つの特徴を持っている。

(i)　人称の非対称性:1・2 人称代名詞は 3 人称名詞の長距離束縛を阻止するが、一方、3 人称名詞は 1・2 人称代名詞の長距離束縛が阻止できない。(Pan 1997, 2001)

(7)　李四$_i$　不喜欢　我$_j$　管　自己$_{*i/j}$ 的　事。
　　李四は私が自分のことを管理するのがすきではない。
(8)　我$_i$　不喜欢　李四$_j$　管　自己$_{i/j}$ 的　事。
　　私は李四が自分のことを管理するのがすきではない。

(7)の 1 人称代名詞“我”は 3 人称名詞“李四”の長距離束縛を阻止するが、一方、(8)の 3 人称名詞“李四”は 1 人称代名詞“我”の長距離束縛が阻止できない。

(ii)　中国語 ziji の長距離束縛は非主語位置にある人称代名詞により阻止され、かつ、その人称代名詞は中国語 ziji の先行詞として解釈できない。(Huang and Tang 1991)

(9)　张三$_i$　认为　[我$_j$ 的　学生]$_k$ 喜欢　自己$_{*i/*j/k}$。
　　張三は私の学生が自分のことがすきだと思っている。

1 人称代名詞“我”は非主語の位置にある、かつ、ziji の先行詞として解釈できない。その場合でも、ziji の長距

離束縛“张三”が阻止された。(9)のような文は次統御束縛(subcommand)と呼ばれている。

(iii) 指示性用法である 3 人称代名詞は阻止効果を起こす可能性もある。(Huang and Tang 1991)

(10) 张三$_i$ 说 他$_j$ 欺骗了 自己$_{*i/j}$。

張三は彼が自分を騙したと言った。

Huang and Tang (1991)は指示性用法である 3 人称代名詞“他”も ziji の長距離束縛を阻止すると主張した。しかし、これに対して“他”が ziji の長距離束縛を阻止しないという反対意見が多い。

(iv) 複数の ziji が文の中に現れるとき、3 人称名詞は阻止効果を起こす可能性もある。(Huang and Tang 1991)

(11) 张三 认为 李四 知道 王五 把 自己$_1$ 的 书 送给了 自己$_2$ 的 朋友。

[自己$_1$= 张三, 自己$_2$= 张三]; [自己$_1$= 李四, 自己$_2$= 李四];

[自己$_1$= 张三, 自己$_2$= 王五]; [自己$_1$= 王五, 自己$_2$= 张三];

[自己$_1$= 李四, 自己$_2$= 王五]; [自己$_1$= 王五, 自己$_2$= 李四];

＊[自己$_1$= 张三, 自己$_2$= 李四]; ＊[自己$_1$= 李四, 自己$_2$= 张三]

張三は李四が王五が自分の本を自分の友達に送ったのを知っていると思っている。

(11)は複数の ziji が現れる文である。“张三”と“李四”は長距離先行詞であり、“王五”は局所的先行詞である。二つの ziji の先行詞になれるのは、二つともに同じ長距離先行詞か、一つは長距離先行詞、もう一つは局所的先行詞かの組み合わせである。[自己$_1$= 张三, 自己$_2$= 李四]と [自己$_1$= 李四, 自己$_2$= 张三]はできないのは、3 人称名詞は阻止効果を起こしたと Huang and Tang (1991)は説明した。

(v) 複数 NP と単数 NP は文の中に同時に現れるとき、異なる振る舞いが現れた。(Tang 1989)

(12) 张三$_i$ 说 他们$_j$ 常 批评 自己$_{i/j}$。

張三は彼らがよく自分を批判すると言った。

(13) 他们$_i$ 说 张三$_j$ 常 批评 自己$_{*i/j}$。

彼らは張三がよく自分を批判すると言った。

(12)には阻止効果が観察されなかったが、一方、(13)には阻止効果が観察された。しかし、(13)の“他们”(かれら)の後ろに“都”(みんな)を入れると、阻止効果が見られなくなる。

(14) 他们$_i$ 都 说 张三$_j$ 常 批评 自己$_{i/j}$。

彼らはみんな張三がよく自分を批判すると言った。

1.2 中国語 ziji 阻止効果についての理論研究

1.1 節では中国語 ziji の阻止効果の特徴をまとめた。中国語 ziji の阻止効果を説明するため、言語学者が文法上と語用上において議論されてきた。文法上において、主に四つの提案がある。(i)照応代名詞(anaphoric pronoun) (Wang and Stillings 1984, Mohanan 1982);(ii)LF 移動(LF movement)(Battistella 1989, Cole, et al. 1990, Cole and Sung 1994, Huang and Tang 1991);(iii)統率範疇パラメータ(Governing Category Parameter) (Manzini and Wexler 1987);(iv)連鎖(chain)のリンク(link) (Progovac 1992, 1993, Tang 1994)。語用上において、主に二つの提案がある。(i)自我帰属理論(self-ascription theory) (Pan 1997, 2001);(ii)話者指向性解釈(logophor) (Huang and Liu 2001)。以下は、簡単に各理論を紹介し、問題点を挙げる。

1.2.1 文法上においての理論

(i) 照応代名詞(anaphoric pronoun)

Wang and Stillings(1984), Mohanan(1982)は束縛原理 A に違反している中国語 ziji と日本語「自分」が Chomsky の挙げた照応形(anaphor)、代名詞類(pronominal)、指示表現(R-expressing)と独立している新しい類の名詞であり、「照応代名詞(anaphoric pronoun)」と名付けた。照応代名詞は照応形と代名詞の両方の特性を持っていると提案し、よって、局所的束縛と長距離束縛の両方を許す。しかし、この提案は阻止効果について説明できない。

(ii) LF 移動(LF movement)

Battistella (1989), Cole, et al. (1990), Cole and Sung (1994)は主要部移動(head-to-head)を主張することに対し、Huang and Tang (1991)は A バー移動(A'-movement)を主張する。どのように移動するか言語学者により異なるが、同じなのは、照応形は LF で潜在的移動(covert movement)することにより、先行詞の近くに移動し、束縛原理 A が適用されるようになるということである。移動により残された痕跡(trace)は統率範疇の主語と同じ人称を持っていなければならない。(5)について、“我/你”と“张三”の人称違いによって長距離束縛が阻止されたことが説明できる。しかし、(7),(8)の人称の非対称性について説明できない。

(iii) 統率範疇パラメータ(Governing Category Parameter)

Manzini and Wexler(1987)によれば、「何が統率範疇になるのか」は統率範疇パラメータによって決められる。統率範疇パラメータの値は 5 つがあり、言語によって決まっている。a.主語を含む名詞句(NP)や節(IP);b.IP（不定詞節を含む）;c.時制のある IP（不定詞節を含まない）;d.直接法時制を持つ IP（仮定法時制を含まない）;e.文全体。英語の統率範疇パラメータ値は a で、中国語と日本語の統率範疇パラメータ値は e である。統率範疇パラメータによると、中国語と日本語の統率範疇パラメータ値は文全体なので、長距離束縛もその統率範疇に入っている。よって、長統率範疇パラメータは長距離束縛が説明できるが、阻止効果について説明できない。

(iv)連鎖(chain)のリンク(link)

Progovac (1992, 1993)は、相対化大主語(relativized SUBJECT)を提案し、照応形は X^0 のみを大主語として受け入れ、その大主語は一致関係を表す AGR である。中国語 ziji と日本語「自分」は顕在的 AGR を持たなくて、潜在的 AGR を持っている。もし潜在的 AGR を持つ言語ならば、文の中の AGR は連鎖になり、統率範疇は文全体に広がり、長距離束縛が可能になる。さらに、Tang (1994)は、AGR だけではなく、MOD(modifier, 修飾語)は共通の照応形 Φ 特性を持つ場合でも、連鎖が形成できる。しかし、AGR と MOD は異なる照応形 Φ 特性を持つ場合、長距離束縛が阻止される。たとえば、(5)について、“我/你”と“张三”の異なる人称によって、長距離束縛が阻止される。この理論も LF 移動理論と同じ、(5)について説明できるが、(7),(8)の人称非対称性について説明できない。

1.2.2 語用上においての理論

(i) 自我帰属理論(self-ascription theory)

Pan (1997, 2001)は、長距離照応形が自我帰属再帰代名詞(self-ascription reflexive)であると主張した。そして、1 人称代名詞と 2 人称代名詞が強制性の自我帰属者(obligatory self-ascriper)で、3 人称代名詞が任意性の自我帰属者(optional self-ascriper)である。この理論により、文法上の理論で説明できなかった(7)と(8)の非対称性について説明できる。しかし、(15)のような文について説明できない。

(15) 他$_i$ 怕我$_j$ 超过 自己$_{i/*j}$。

彼は私が自分を超すことを恐れている。

自我帰属理論によると、(15)の文の ziji は強制性の自我帰属者 1 人称代名詞“我”でなければならない。しかし、(15)の ziji は“我”を先行詞として解釈できない。

(ii) 話者指向性解釈(logophor)

Huang and Liu (2001)は話者指向性解釈(logophor)を提案し、この理論は Sells (1987)が主張したソース(source)，自我(self)，基点(pivot)から由来したのである。ソース(source)は自我(self)を含む、自我(self)

は基点(pivot)を含むという関係になっていて、逆には成り立っていない。

Huang and Liu (2001)は阻止効果が視点の衝突によるものであると述べている。例えば、(5)“张三$_i$觉得我$_j$对自己$_{*i/j}$没信心。”について、もし“张三”が ziji の先行詞として解釈するならば、ソース(source)の働きを持ち、基点(pivot)の働きにもなる。それにより、指示中心(deictic center)“我”と衝突し、なぜなら、発話者が“张三”の立場に立つことが要求されるからである。同じ人が同じ時間に異なる立場に立つことが不可能で、このような視点の衝突により、“张三”が ziji の先行詞として解釈できない。この理論は人称非対称の(7)と(8)について説明できるが、(15)について説明できない。

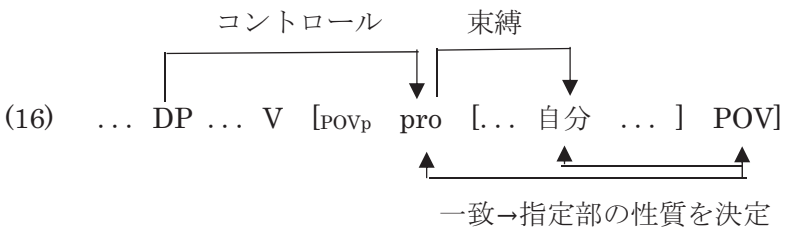
2　日本語「自分」の阻止効果

第 1 節において、中国語 ziji の阻止効果の特徴をまとめ、そして、中国語 ziji の阻止効果を説明する理論を紹介し、各理論において説明できない反例があると述べた。第 2 節において、日本語「自分」の阻止効果についての先行研究を概観する。

前述したように、(6)「張三$_i$は［僕/君$_j$が　自分$_{i/j}$を　信用していない］と思っている」の日本語では、「自分」の主節主語による束縛が阻止されていない。よって、日本語「自分」の阻止効果についてあまり考察されていない。しかし近年、Nishigauchi(2014)、西垣内(2012,2014)は日本語「自分」の阻止効果を考察し、阻止効果を説明する文法上の理論を提案した。西垣内(2014)は西垣内(2012)、Nishigauchi(2014)から派生、発展した論文であるため、ここで西垣内(2014)を中心に論じる。

2.1 西垣内(2014)の主張

西垣内(2014)は再帰形「自分」が視点表現の投射の中に現れ、その投射の指定部に現れる名詞句によって局所的な束縛を受けると主張する。視点投射(POV projection)と関与する視点表現が少なくとも次の 5 つがあり、①証拠性:「そう、がる、Φ」;②認識、直接的経験:「寒い、V たい」;③評価:「(て)しまう」;④受益:「やる、くれ」;⑤ダイクシス:「行く、くる、1,2 人称代名詞など」。視点表現の投射は構造上の階層をなしており、証拠性がもっとも上位、ダイクシスがもっとも下位である。(16)は西垣内(2014)の主張である(西垣内 2014: 115)



pro は意識焦点を探す「意識性の pro」と視点焦点を探す「基準の pro」がある。意識焦点は指示対象が pro を含む POV 投射の意味内容を意識していると解釈される 1 つの項であり、視点焦点は話者が指示対象と視点を共有していると解釈される 1 つの項である。意識焦点の認定に人称は関与しないため「阻止効果」は起こらない。視

点焦点には人称が関与するため「阻止効果」が起こると述べている。西垣内(2014)は(17)のような逆行束縛の例を用いて「阻止効果」を説明した。

(17) a. 先生が自分$_i$をよびにきた時、タカシ$_i$はぐっすり眠っていた。（西垣内 2014: 111）

b. *僕が自分$_i$をよびにきた時、タカシ$_i$はぐっすり眠っていた。（西垣内 2014: 121）

c. 先生が自分$_i$をほめた時、タカシ$_i$はひどく驚いた。（西垣内 2014: 111）

d. ?僕が自分$_i$をほめた時、タカシ$_i$はひどく驚いた。（西垣内 2014: 116）

(17a)は視点焦点を探す「自分」逆行束縛の文であり、人称が関与するため、(17a)の「先生」が(17b)の「僕」に変わると、「自分」は「タカシ」を指すことが阻止される。一方、(17c)は意識焦点を探す「自分」逆行束縛の文であり、人称が関与しないため、(17c)の「先生」が(17d)の「僕」に変わると、容認性が下がるが、(17b)のような劣化は見られない。つまり、「自分」は「タカシ」を指すことは阻止されない。

2.2 西垣内(2014)の問題点

西垣内(2014)は視点投射指定部に現れるのは視点保持者であり、この位置には多くの場合 pro が生起し、(16)の pro のコントロールは「非義務的コントロール」であると主張した。しかし、「非義務的コントロール」は PRO の特徴であり、pro の特徴ではない。pro は文の中に音声的に還元できるのに対し、PRO は音声的に還元できない。つまり、もし pro だとすれば、c 統御を必要とし、非義務的コントロールはできない。したがって、西垣内(2014)が提案された(16)の pro は適切ではないと考える。

西垣内(2014)に挙げた日本語(17b,d)のような「阻止効果」は中国語 ziji のような「阻止効果」と違い、日本語の場合、1・2 人称の介入により文が完全に不自然な文になるということに対し、中国語の場合、1・2 人称の介入により、長距離束縛のみ阻止され、文は自然な文である。また、西垣内(2014)に挙げた例はすべて逆行束縛の例であり、中国語 ziji のような逆行束縛ではない例について述べていない。つまり、西垣内(2014)では、逆行束縛ではなく、長距離束縛のみ阻止される自然な日本語「阻止効果」の文について何も論じていない。

そして、西垣内(2014:131)は、「阻止効果の現象は中国語で顕著に見られるものであり、本論で示した分析的枠組みが、中国語の阻止効果を分析する上で有効であるかを検証しなければ、本論文を含む研究プログラムが不十分なものと認めなければならない。」と述べ、実際に西垣内(2014)の分析は中国語 ziji の阻止効果(5)のような文について説明できない。なぜかというと、西垣内(2014)の分析により、(5)の文は意識焦点を探す文であり、人称が関与しないため、阻止効果が見られないはずである。しかし、(5)は中国語 ziji の阻止効果について代表的な例である。

3. 中国語 ziji と日本語「自分」の阻止効果比較

日本語「自分」には本当に阻止効果がないのか。確かに(5)と(6)の例からみると、中国語 ziji は阻止効果があり、

日本語「自分」は阻止効果がない例である。また、1.1 で述べた中国語 ziji 阻止効果の特徴(i),(iv)は日本語「自分」には観察されない。中国語 ziji 阻止効果の特徴(iii)は検討する必要があり、特徴(v)は分配解釈と関係するため、ここでは触れない。では、特徴(ii) 次統御束縛において中国語 ziji と日本語「自分」を比較してみる。

(18),(19)の文は(9)のような次統御束縛(subcommand)である。(9)は再掲する。日本語は(20)である。

(18) 导师$_i$ 认为［我$_j$ 的 骄傲］害了 自己$_{*i/j}$ 。
(19) 指導教官$_i$は［私$_j$のプライド］が 自分$_{*i/j}$を悪くした と思っている。

(9) 张三$_i$ 认为 [我$_j$ 的 学生]$_k$ 喜欢 自己$_{*i/*j/k}$。
(20) 張三$_i$は [私$_j$の学生]$_k$が 自分$_{i/*j/k}$のことがすきだと思っている。

(20)の日本語「自分」は阻止効果が観察されないが、つまり、日本語「自分」が主節主語「張三」を先行詞として解釈できる。一方、(19)の日本語の文において阻止効果が観察される。したがって、日本語「自分」にも「阻止効果」があると言える。しかし面白いのは、(18)の“骄傲”は“意见”に、(19)の「プライド」は「意見」に変更したら、阻止効果が見られなくなる。

(21) 导师$_i$ 认为［我$_j$ 的 意见］害了 自己$_{i/j}$ 。
(22) 指導教官$_i$は［私$_j$の意見］が 自分$_{i/j}$を悪くした と思っている。

さらに、(18)の“骄傲”と“害”は“帮助”と“救”に、(19)の「プライド」と「悪くする」は「ヘルプ」と「救う」に変更したら、長距離束縛のみを許すことになる。

(23) 导师$_i$ 认为［我$_j$ 的 帮助］救了 自己$_{i/*j}$ 。
(24) 指導教官$_i$は［私$_j$のヘルプ］が 自分$_{i/*j}$を救った と思っている。

(23)は、中国語 ziji は 1・2 人称の介入により、必ずしも阻止効果が現れるとは言えない例である。前述した(15)の文も同じく、“他”と ziji の間に 1 人称“我”が介入しても、ziji の阻止効果が現れない例である。(25)のような日本語「自分」の例も長距離束縛のみを許すが、局所的束縛は許さない。

(15) 他$_i$ 怕我$_j$ 超过 自己$_{i/*j}$。
(25) 彼$_i$は私$_j$が自分$_{i/*j}$を超すことを恐れている。

そして、(26a)の“问”（聞く）から(26b)の“告诉”（教える）に、(27a)の“名字”（名前）から(27b)の“分数”（成績）に、(28a)の“说”（言う）の前に副詞“委屈地”（悲しく）に変わると、中国語 ziji と日本語「自分」の指向が変わる。

(26) a. 我$_{i}$ 问过 他$_{j}$ 好几遍 自己$_{*i/j}$的 名字。

b. 我$_{i}$ 告诉过 他$_{j}$ 好几遍 自己$_{i/*j}$的 名字。

a.' 私$_{i}$は　何回も　彼$_{j}$に　自分$_{*i/j}$の名前を聞いた。

b.' 私$_{i}$は　何回も　彼$_{j}$に　自分$_{i/*j}$の名前を教えた。

(27) a. 我$_{i}$ 问过他$_{j}$ 自己$_{*i/j}$ 的 名字。[1)]

b. 我$_{i}$ 问过他$_{j}$ 自己$_{i/j}$ 的 分数。

a.' 私$_{i}$は　彼$_{j}$に　自分$_{*i/j}$の名前を聞いた。

b.' 私$_{i}$は　彼$_{j}$に　自分$_{i/j}$の成績を聞いた。

(28) a. 张三$_{i}$ 说 李四$_{j}$ 不相信 自己$_{i/j}$。

b. 张三$_{i}$ 委屈地说$_{j}$ 李四 不相信 自己$_{i/*j}$。

a.' 太郎$_{i}$は　次郎$_{j}$が　自分$_{i/j}$を信じていない　と言った。

b.' 太郎$_{i}$は　次郎$_{j}$が　自分$_{i/*j}$を信じていない　と悲しく言った。

まとめると、日本語「自分」にも1・2人称の介入により、長距離束縛が阻止された例があることを示した。中国語 ziji の阻止効果と比べて例が少ないことは事実である。また、指向性のある動詞、名詞、副詞などに変更すると、中国語 ziji と日本語「自分」の先行詞指向にも影響していることを示した。

4. 提案

中国語 ziji と日本語「自分」の先行詞指向について、どのような基準で先行詞を決めるのか、あるいは、どの要因で先行詞の選択に影響するのか、ということが重要である。文法で決めることは重要である一方、語用で決めることも非常に重要であることが前述で分かった。心理言語学では、文をどのように理解するのかについて動詞が中心的な役割を働いていると言われている。照応形の先行詞指向も動詞と関係があると考えている。

生成文法では、ある述語(predicate)が、その語彙特性として項(argument)をいくつ必要とし、また、それぞれの項がどのような主題役(θ-role)を担うかを、語彙目録(lexicon)で指定したものである。たとえば、動詞 put は、主題役動作主(agent)を担う項を外項(external argument)(主語となる項)として選択し、また主題(theme)、場所(location)を担う二つの項を内項(internal argument)(補部(complement)となる項)として選択する。照応形と関係ある動詞は二項動詞と三項動詞である。それらの動詞に双方向の動詞と単方向の動詞に分けている。単方向の動詞には他方指向動詞と自我指向動詞に分けている。

たとえば、"相信"(信じる)は双方向動詞であり、語彙の指向は他の人でもいいし、自分に指してもいい。その他、"责备"(責める)、"喜欢"(好きだ)なども挙げられる。"讨好"は単方向動詞の他方指向動詞であり、語彙の指向は他の人だけで、自分を指すことができない。"救"(救う)、"抱怨"(文句を言う)、"怕"(恐れる)などが挙げられる。"卖弄"(自慢する)は単方向動詞の自我指向動詞であり、語彙の指向は他の人ではなく、

自分を指す。“炫耀”（誇示する）などが挙げられる。照応形を含む文に双方向動詞がある場合、局所的束縛と長距離束縛の両方を許す。単方向動詞の他方指向動詞の場合、長距離束縛のみを許す。単方向動詞の自我指向動詞の場合、局所的束縛のみを許す。文の中に、双方向動詞と単方向動詞が同時に存在する場合、以下(29)の優先順位で照応形の先行詞を決めると仮定する。

(29)　単方向動詞＞双方向動詞

たとえば、(30a)では、“知道”（知る）と“相信”(信じる)は双方向動詞であり、補文主語“李四”と主節主語“张三”の両方がziji の先行詞として解釈できる。一方、(30b)では、“讨好”は単方向動詞の他方指向動詞であり、照応形 ziji の先行詞選定は双方向動詞“知道”（知る）より単方向動詞他方指向を優先し、主節主語“张三”だけが先行詞として解釈できる。(30c)では、“卖弄”（自慢する）は単方向動詞の自我指向動詞であり、照応形 ziji の先行詞選定は双方向動詞“知道”（知る）より単方向動詞自我指向を優先し、補文主語“李四”だけが先行詞として解釈できる。(30d)では、“怕”（恐れる）は単方向動詞の他方指向動詞で、“卖弄”（自慢する）は単方向動詞の自我指向動詞である。その場合、補文主語“李四”と主節主語“张三”の両方がziji の先行詞として解釈できる。

(30)　a. 张三$_{i}$　知道　李四$_{j}$　相信　自己$_{i/j}$。

張三は李四が自分を信じると知っている。

b. 张三$_{i}$　知道　李四$_{j}$　讨好　自己$_{i/*j}$。

張三は李四が自分を喜ばせると知っている。

c. 张三$_{i}$　知道　李四$_{j}$　卖弄　自己$_{*i/j}$。

張三は李四が自分を自慢すると知っている。

d. 张三$_{i}$　怕　李四$_{j}$　卖弄　自己$_{i/j}$。

張三は李四が自分を自慢するのを恐れている。

阻止効果は文の中の動詞がすべて双方向動詞の文のみ現れている。(30d)では、“李四”が1人称代名詞“我”に変更しても、“张三”の先行詞指向は阻止できない。つまり、「张三$_{i}$　怕　我$_{j}$　卖弄　自己$_{i/j}$。」である。双方向動詞は文の中に現れているほかの要素により、方向性を変更することができる。よって、阻止効果が観察されるわけである。例えば、(5)では、“觉得”(思う)は双方向動詞である。補文の「主語＋対＋ziji＋動詞」の文型は「主語＋動詞＋ziji」に変換できないが、この文型に入る動詞は双方向動詞である。補文主語の1・2人称代名詞になると、補文の双方向動詞の方向性は自我方向性だけに限定されるようになる。よって、主節主語“张三”の先行詞指向は阻止される。

(5) 张三$_{i}$ 觉得［我/你$_{j}$ 对　自己$_{*i/j}$　没信心］。

(7)と(8)の人称非対称性について、(8)では、“管”（管理する）は双方向動詞のままで、長距離束縛が阻止されていないが、(7)は1人称代名詞“我”により、“管”（管理する）は双方向動詞から単方向動詞の自我指向動詞に変わり、長距離束縛が阻止される。

(7)　李四$_i$　不喜欢　我$_j$　管　自己$_{*i/j}$ 的　事。
　　李四は私が自分のことを管理するのがすきではない。
(8)　我$_i$　不喜欢　李四$_j$　管　自己$_{i/j}$ 的　事。
　　私は李四が自分のことを管理するのがすきではない。

前述に現れた反例(15)では、動詞“怕”（恐れる）と“超”（超える）は単方向動詞の他方指向動詞であり、ziji は主文主語の“他”のみを許す。(23)の動詞“救”（救う）は単方向動詞の他方指向動詞であり、ziji は主文主語の“导师”（指導教官）のみを許す。(28)は副詞“委屈地”（悲しく）に加えることにより、“说”（言う）は双方向動詞から単方向動詞の他方指向動詞に変わり、ziji は主文主語の“张三”のみを許す。

(9),(18),(21)はここで再掲する。“认为”（思う）、“喜欢”（好きだ）、“害”（害する）は双方向動詞である。(9)[我的学生（私の学生）]は 有生で、(18) [我的骄傲（私のプライド）]と(21) [我的意见（私の意見）]は無生である。照応形 ziji は有生しか指すことができない。したがって、(9)では有生の1人称代名詞“我”を含む次統御束縛は双方向動詞の方向性を変わることができる。一方、(18)[我的骄傲（私のプライド）]は無生のように見えるが、[我的意见（私の意見）]と異なり、[骄傲（プライド）]は“我”の性格の一部として理解され、双方向動詞の方向性を変わることができる。よって、(9)と(18)は長距離束縛が阻止され、(21)は阻止されない。

(9)　张三$_i$　认为　[我$_j$ 的　学生]$_k$ 喜欢　自己$_{*i/*j/k}$。
(18) 导师$_i$ 认为 [我$_j$ 的　骄傲] 害了　自己$_{*i/j}$ 。
(21) 导师$_i$ 认为 [我$_j$ 的　意见] 害了　自己$_{i/j}$ 。

以上、主に中国語 ziji を例にして議論していた。日本語「自分」の阻止効果に対して、動詞の指向性を用いて一部説明できる。たとえば、(19),(22),(24)がその例である。しかし、(6)について説明できない。中国語 ziji と日本語「自分」は本質的に異なるかもしれない。よって、一つの理論でまとめて中国語 ziji と日本語の「自分」の先行詞指向を分析するのは不可能だと考える。

(19) 指導教官$_i$は［私$_j$のプライド］が　自分$_{*i/j}$を悪くした　と思っている。
(22) 指導教官$_i$は［私$_j$の意見］が　自分$_{i/j}$を悪くした　と思っている。
(24) 指導教官$_i$は［私$_j$のヘルプ］が　自分$_{i/*j}$を救った　と思っている。
(6) 張三$_i$は［ 僕/君$_j$が　自分$_{i/j}$を　信用していない］と思っている。

日本語の照応形は「自分」以外、「自分自身」「彼／彼女自身」「お互い」等もあり、中国語の照応形は“自己 ziji”以外、“本人” “他/她自己” “自身”などもあり、日本語の「自分」は単純に中国語の“自己 ziji”だけに対応するのではなく、ほかの中国語の照応形の意味を含む可能性があり、同様に、中国語の“自己 ziji”は日本語の「自分」だけに対応するのではなく、ほかの日本語の照応形の意味を含む可能性もある。

Oshima (2004)が日本語の「自分」を、再帰(reflexive)の「自分」、話者指向性(logophor)の「自分」、エンパシー(empathy)の「自分」に分けた。再帰(reflexive)の「自分」は局所的束縛を許す「自分」で、話者指向性(logophor)の「自分」とエンパシー(empathy)の「自分」は長距離束縛を許す「自分」である。このように日本語の「自分」を更に詳しく分類する方法が妥当だと考える。一方、中国語“自己 ziji”について、“自己 ziji”は再帰(reflexive)の“自” と代名詞(pronoun)の“己”の組み合わせで、“自”と“己”のお互いの働きにより“自己 ziji”の複雑さを反映していると考えている。

5. まとめ

Chomsky (1981)の束縛原理が提案されてから、中国語の ziji と日本語の「自分」は束縛理論 A に違反している長距離束縛照応形としてよく研究されてきた。中国語の ziji と日本語の「自分」は類似点が多いように見えるが、実際にはいろいろな相違点が存在する。特に阻止効果について、中国語 ziji の場合よく現れているのに対し、日本語「自分」はあまり観察されていない。本論文では、中国語 ziji と日本語「自分」の阻止効果を比較研究し、先行研究の問題点を論じた。そして、動詞の指向性の観点から阻止効果を分析するのを試みた。動詞指向性は中国語 ziji の阻止効果を分析するには有効性を持つ一方、日本語「自分」の阻止効果にはさらに検討する必要がある。また、双方向動詞、単方向動詞についての概念自体を正確に述べる必要があり、これはこれからの課題としている。

参考文献

Battistella, E. 1989. Chinese reflexivization: A movement to Infl approach. *Linguistics* 27: 987-1012.

Cole, P., Hermon, G. and Sung, L. M. 1990. Principles and parameters of long-distance reflexives. *Linguistic Inquiry* 21: 1-22.

Cole, P. & Sung, L. M. 1994. Head movement and long-distance reflexives: The case of Chinese *ziji*. *Linguistic Inquiry* 25: 355-406.

原口庄輔・中村捷編 1996『チョムスキー理論辞典』研究社出版.

Huang, C. T. J. & Liu, L. 2001. Logophoricity, attitudes and *ziji* at the interface. In P. Cole et al. (eds.). 141-195.

Huang, C. T. J. & Tang, C. C. J. 1991. The local nature of the long-distance reflexives in Chinese. In J. Koster and E. Reuland (eds.). *Long-distance Anaphora.* Cambridge: Cambridge University Press. 263-282.

Huang, Y. H. Reflexives in Chinese. Studies in English Literature and Linguistics 10.

Manzini, M. R. & Wexler, K. 1987. Paramaters, binding theory and learnability. *Linguistic Inquiry* 18:413-444.

Mohanan, K. P. 1982. Grammatical relations and anaphora in Malayalam. *MIT Working Papers in Linguistics* 5: 163-190.

Nishigauchi, T. 2014. Reflexives binding: Awareness and empathy from a syntactic point of view. *Journal of East Asian Linguistics* 23: 157-206.

西垣内泰介, 2012,「日本語の再帰表現と阻止効果」,『神戸松陰女子学院大学研究紀要』15: 103-117.

西垣内泰介, 2014,「エンパシーと阻止効果 -「自分」の束縛と「視点投射」-」,『言語研究』146:109-133.

Oshima, D. Y. 2004. Zibun revisited: empathy, logophoricity, and binding. *University of Washington Working Papers in Linguistics* 23: 175-190.

Pan, H. H. 1997. *Constraints on reflexivization in Mandarin Chinese*. New York: Garland.

Pan, H. H. 2001. Why the blocking effect? In P. Cole et al. (eds.). 279-316.

Progovac, L. 1992. Relativized SUBJECT: Long-distance reflexives without movement. *Linguistic Inquiry* 23:671-680.

Progovac, L. 1993. Long-distance reflexives: Movement-to-Infl versus relativized SUBJECT. *Linguistic Inquiry* 24: 755-772.

Sells, P. 1987. Aspects of Logophoricity. *Linguistic Inquiry* 18: 445-479.

Tang, C. C. J. 1989. Chinese Reflexives. *Natural Language and Linguistic Theory* 7: 93-121.

Tang, C. C. J. 1994. A note on relativized SUBJECT for reflexives in Chinese. In B. Lust, M. Suner and J. Whitman (eds.). 79-82.

Wang, Jia. L. & Stillings, Justine. T. 1984. Chinese reflexives. In C. Ning et al. (eds.). *Proceedings of the first Harbin Conference on Generative Grammar*. Harbin, China: Heilongjiang University Press. 100-109.

註

1) “我”(私)が記憶を失った場合、“自己”は“我”を指すことができる。

本研究の一部は、日本学術振興会科研費基盤研究(C)研究課題「照応表現第二言語習得研究-中国語・日本語・英語を中心に-」の補助を受けている。